

〔一〕次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「えい、必要を論ずるな」

これはシェイクスピアの「リア王」のなかの台詞だ。

リア王が大勢の家臣を連れて方々に出かけるのを、姉娘たちがとがめて「そんなに大勢の家臣を引き連れてゆかれる必要はありません」と言って、家臣を半分にし、そのまた半分にし、ついには家臣を取り上げてしまう。そしてリア王はただ一人、荒野を彷徨^{さまよ}う存在になってしまうのだ。リア王は、最初、そんなに大勢の家臣は要らないと言われたとき、癩癩^{かんじやく}を起してあの有名な「えい、必要を論ずるな」という言葉を吐くのである。

もつともこれは、私のうる覚えの「リア王」解釈だから、きちんと原典に当たられる方がよろしい。

必要か必要でないかを論じたトタン^イ、あらゆる「文化」、「伝統」そして「夢」までもが、その存在意義を失い始める。

リア王という存在は、伝統であり、「王」という名の伝統文化だったから、ひとたび「必要」を問われると、滅びざるを得なかったのである。「リア王」は、孝行娘コーデイリア^ウの物語ではなく、滅びゆく文化の物語なのだ。

もつともこれまた、私のうる覚えの「リア王」解釈だから、きちんと原典に当たられる方がよろしい。

人間にとって必要なものは何か。「命だ」と答えたとする。そのとたん、「命懸け^エ」というのは必要ではなくなってしまうだろう。何故なら、必要な命まで懸けてしまうことは不要だからだ。

建築が、機能と経済と社会性の上に立って「必要」を論じ始めたとき、キョウギ^オの近代建築が始まったと言えるかもしれない。まず、「裝飾」がそこで死んだ。その後、建築はあらゆるものの必要を問うた。必要以上に金を掛けてよいのか。必要以上にガンジ^カョウに作ってよいのか(以上は議会対策)。必要以上に建築を長持ちさせる必要があるのか。必要以上に建設に手間を掛けてよいのか(以上は株主訴訟対策)。必要以上に……、必要以上に……、こうして多くのものが続々と死んだ(これが、近代社会なのか)。そこで、リア王は言う、「えい、必要を論ずるな」。かくして近代建築は今に至った。それが近代建築から現代建築への道であり、そこに至る建築の「歴史」である。その過程で、「歴史」もまた現代建築にとつ

ては不要だという判断が主流を占めたとしても、その判断自体は一つの歴史として残る。それが「歴史」というものだからだ。ずぶ濡れに濡れた犬が身を震わせて雨水を振り飛ばすように、「歴史」を振り飛ばすことは誰にもできない。

私はこれで、言うべきことを言い尽くした気がする。しかし、この後少しだけ、「必要」と離れて「歴史」について述べておこう。なぜなら、私は建築の歴史の中に身を置いているからだし、ここでは「歴史」とは何かとも問われているからだ。

今年の大学院の「建築史学第一」という講義で、私は「似ている」というテーマを掲げた。複数の事象が「似ている」と感じられるところから、(建築に限らず)歴史の探究(とも限らず、そこには自然科学の探究も人文科学の探究も含まれる)と思うのだが、そういうもの)が始まる部分があるからだ。

「似ている」というのは印象である。それを語ることは印象批評というものにつながる。これは悪いことではない。印象批評の裏には、その印象を持つ目があるからだ。目さえあれば物が見えるというわけではなく、幾つかの物を見るうちに、時々「似ている」という印象が湧き起こることがある。それは、「物を見ていた」という一つの証拠だ。もちろん、「似ている」という以上、どこが、なぜ似ているのかを説明できなければならない。それができるといことが、「物を見ていた」という証拠になるのだから。

建築の場合、「似ている」というのはAの建物とBの建物が似ているという場合もあるし、Aという建物が猫に似ているという場合もある。前者は比較であり、後者は直喩である。さらには暗喩というものもある。これを建築の例に当て嵌めるのはなかなか難しいのだが、例えば、「江戸の建築にはすべて、鏝鳴りがしている」とか、「平安時代の建築は曲水の宴の香りを漂わせている」と言ったとすれば、それを暗喩と言えるかもしれない。また、反語というのものもある。「溶ける建築」とか、「破壊的な建築」とかいった類の言説だ。

また、建築の設計の段階での事象として、はじめ平面や立面がAであったものが、やがてBというかたちに変化してゆくケースもある。これは変化であり、発展とも考えられる。その変化・発展の理由を探ることは、創造の秘密に迫ることであり、創作過程を冷静に分析する作業でもある。そこでは、どこが似ているかを問う作業とともに、どこが異なってきたかを見定める作業が重要になってくる。「似ている」と「違う」は、ひとつつながりの現象なのだ。

さらに、Aの建物とBの建物が似ているという場合、それは「AがBに似ている」場合もあれば、「BがAに似ている」場合もある。そのどちらなのだと言ふことは、問題を一步進めることになる。これは影響関係の確定だからである。しかし、AとBが、実は共通して「無くなってしまったC」に似ているから、結果的にAとBが似てしまったというケースも考えられる。さらには「AがBに似ている」のは、その間に隠れた「C」があつて、それを媒介とした影響関係があるためだというケースも考えられる。「似ている」ということの奥は深いのだ。

もつと考えると、「AがBに似ている」のは、それぞれが同じような時代精神や精神状況や経済状況に置かれていたがために、互いに全然直接的関係なしに似てしまったという場合もあり得るのだ。こうした例として、単純には「二〇世紀の建築の多くは、コンクリートを使っているという点で似ている」と言うこともできる。しかし、このような指摘は、数百年後になってから言うのでなければ、単なる馬鹿な指摘である。しかしながら、もつと想像力を活発に働かせれば、「ルネサンスの建築と、ガンダーラ美術のうちの或るものが似ている」、「現代建築はエジプト建築に似ている」という事態だつて想定できなくはないかもしれない。言い換えれば、先ほど述べた「C」が、実は現実には「存在しないC」だったのだというケースが、これだともいえる。事実、二〇世紀初頭のT・E・ヒュームという人は、「現代芸術はエジプト芸術に似ている」という意味のことを述べている。また、私は「一九世紀の英国労働者住宅と、一九五〇年代の公団住宅の2DKが酷似したプランを持っている」と指摘したことがある。しかし、これもあまり勝手にやり過ぎると、「リーズナブル」であり「イマジナティブ」であるとは認められなくなり、英語では「ファー・フェツチド^(*)」だと言われる事態に陥る。さればこそ、「似ている」ことの奥は深い。

さて、「似ている」という指摘を行ないたくなくなるのは何故なのか。まずはレッテル貼りであろう。それによって、或る建物の位置づけができるように思われるからだ。物との類似性によってそのものの位置が見えてくるということとは、しばしばある。またある建物が、猫に似ていようが犬に似ていようが大して違いはないにもかかわらず、ときに人はその違いに執着することがある。それは「この建物は猫だ」という自分の指摘が、自分自身の立場と密接に関わっているからだ。

人物評における「君は結局は××の類なのだよ」といった指摘も、相手の位置づけをしている行為なのだが、同時にその

ような位置づけを行なうのは、往々にして自分の位置を示したいからだというケースがある。相手を見下した位置に置くことによって、自分の優位を示したりすることがあるからだ。あるいは相手の魅力を「ショウヨウウウすることによって、自分の好意を相手に示そう」としたりするケースもある。

対象の位置を決めることは、自分の位置を示すことでもあるのだ。こうしてわれわれは世界の中で自分と相手の位置を見出し、世界全体の構造を決めてゆく。「歴史」は、この「世界全体の構造を決めてゆく」という作業と、根本的なところで深く結び付いている。なぜなら建築も人間も、世界の構造のなかでその社会的位置を占めており、しかも社会は常に歴史的に形成されてきたものだからだ。世界の構造を社会的に把握するためには、歴史的構造を知らずに済ますわけにはゆかない。ここに、歴史と社会との結び付きがある。

だとすれば、ある建築が猫に似ていると言うためには、それなりの歴史的背景が考えられなければならない。それが、こうした指摘をする自分の側の歴史的背景の問題なのか、それとも猫に似た建築が出現するという歴史的背景の問題なのか、そこは一概に言えない。けれども、われわれ及びあらゆる建築が「歴史的存在」であるという、「歴史的事実」だけは曲げられないのである。

われわれが建築を「メグって」^セ「似ている」という興味を抱くとき、その問いはある時代や地域の中で完結するかもしれないし、時代や地域を越えて広がるかもしれない。むしろ、その興味は時代を越え、地域を横断して広がる可能性を持つと考える方が自然であろう。とすれば、現代建築を対象とする興味が、時代を遡ってゆくこともまた、自然のことと思うべきであろう。

こうして最後に、われわれは「歴史は現代建築に必要か」という、最初の設問に戻ってくることになる。現代建築を現代という時代の中に封じ込めたままで完結させることと、時代を越えて広げてゆくこととの間には、世界の構造をどのようなかたちで把握しているかの違いが投影されるだろう。現代は歴史を捨象して成立するのか。(現代とは限らず)建築は歴史を捨象して成立するのか。問うべき事柄は極めて広く、そして深い。

*フアー・フェッチド (far-fetched) とは、「とってつけたような」「じつげの」の意。

(鈴木博之「歴史は現代建築に必要か」より)

問一 「とがめて」^アとあるが、「とがめる」の意味として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 1

1 否定する 2 非難する 3 悲嘆する 4 説得する 5 激怒する 6 懇願する

問二 「命懸け」^エとあるが、「懸ける」の使い方として**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。 2

1 心に懸ける 2 首に懸ける 3 尻目に懸ける
4 注意に懸ける 5 獄門に懸ける 6 願いを懸ける

問三 「反語」^クの言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 3

1 イメージ 2 ウイット 3 ダメージ
4 ロジック 5 アイロニー 6 アナロジー

問四 「隠れた」^ケとあるが、「隠」を用いた語句として**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。 4

1 隠気 2 隠居 3 隠者 4 隠逸 5 隠然 6 隠顕

問五 「さればこそ」^コとあるが、「こそ」と異なる品詞を含む語句を次の中から一つ選べ。 5

1 目さえ 2 思うべき 3 作業でも 4 少しだけ 5 リア王は 6 「夢」まで

問六 「一概に」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 6

- 1 一丸に
- 2 一応に
- 3 一見に
- 4 一時に
- 5 一堂に
- 6 一様に

問七 「捨象」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。 7

- 1 止揚
- 2 抽出
- 3 帰納
- 4 排除
- 5 遮蔽
- 6 観象

問八 「トタン」「キョウギ」「ガンジヨウ」「シヨウヨウ」「メグ」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一つ選べ。 8 12

- | | | |
|---|--|--|
| <p>イ 1 製品のヨウト</p> <p>4 トテイ制度</p> | <p>2 トアミを打つ</p> <p>5 思いをトロする</p> | <p>3 トタンをなめる</p> <p>6 財産をジヨウトする</p> |
| <p>オ 1 キョウテイを結ぶ</p> <p>4 キョウリヨウな人物</p> | <p>2 キョウカイ線を引く</p> <p>5 キョウゲンを鑑賞する</p> | <p>3 キョウヨウを深める</p> <p>6 ふりががキョウシンする</p> |
| <p>カ 1 シジヨウ経済</p> <p>4 キジヨウな振る舞い</p> | <p>2 笑いジヨウゴ</p> <p>5 願望がジヨウジュする</p> | <p>3 芸術シジヨウ主義</p> <p>6 他人にビンジヨウする</p> |
| <p>サ 1 イツシヨウに付す</p> <p>4 シヨウメイ問題を解く</p> | <p>2 シヨウジンを重ねる</p> <p>5 チサンチシヨウの作物</p> | <p>3 左右タイシヨウな図形</p> <p>6 イメージにシヨウカする</p> |
| <p>セ 1 ジュンレイの旅</p> <p>4 ジュンタクな資金</p> | <p>2 空気のジュンカン</p> <p>5 ジュンバンに回る</p> | <p>3 先例にジュンずる</p> <p>6 八月のジヨウジュン</p> |

問九

「リア王」は、孝行娘コーデイリアの物語ではなく、滅びゆく文化の物語」とあるが、それはどういうことか。最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

13

- 1 「リア王」は王も国も滅びてしまう物語であること。
- 2 「リア王」は王という名の伝統文化が壊れてしまう物語であること。
- 3 「リア王」は姉娘たちの策略で王の権力が奪われる物語であること。
- 4 「リア王」は近代社会が文化や伝統、夢を破壊する物語であること。
- 5 「リア王」は孝行娘コーデイリアが命を懸けても王を救えない物語であること。
- 6 「リア王」は孝行娘コーデイリアではなく、滅び行く姉娘たちが主役の物語であること。

問十

「歴史」を振り飛ばすことは誰にもできない」とあるが、その説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

14

- 1 建築には歴史的背景が反映される。
- 2 歴史が世界全体の構造を反映している。
- 3 建築は常に歴史のなかに存在している。
- 4 建築は歴史のなかで様々な必要を問い続けている。
- 5 歴史の必要を論ずることから現代建築が成立する。
- 6 人間も建築も歴史的存在であるという事実だけは変わらない。

問十一

「対象の位置を決めることは、自分の位置を示すことでもある」とあるが、その説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

15

問十二

本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

16

(

16

)の欄に、二カ所マークすること

- 1 対象の位置は自分の社会的位置によって決まる。
 - 2 対象の位置は自分の歴史的背景によって決まる。
 - 3 対象の位置を決めるとき、自由な位置を選ぶことができる。
 - 4 対象の位置を決めるとき、自分の優位が前提となっている。
 - 5 世界全体の構造を決めていくと、相手と自分の位置が自然と決まる。
 - 6 世界全体の構造のなかで、相手の位置が決まると同時に、自分の位置も決まる。
- 1 現代建築は、「装飾」や「歴史」を捨象することで、機能性を高めて発達し続けてきた。
 - 2 現代建築は、「必要」性を失うことで滅びつつあった文化や伝統をつなぎ留めるものである。
 - 3 現代建築は、われわれが世界の構造をどのように捉えているかという問題と密接に関わっている。
 - 4 「似ている」ということの要因には、多様な影響関係やケースが想定される。
 - 5 「似ている」と語る行為には、論理的な分析以上に、奔放な想像力が要請される。
 - 6 「似ている」という直観は、AとBの影響関係を明らかにする確かな手段を提供する。

〔二〕次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「カタル(語る)」は、語源的には「カタドル(象る)」に由来すると言われている。それでは何を象るのかと問われれば、「経験」と答えるのが最も適切な応接であろう。言葉はわれわれの経験に形を与え、それを明瞭な輪郭をもった出来事として描き出し、他者の前に差し出してくれる。本人にのみ接近可能な私秘的「体験」は、言葉を通じて語られることによって公共的な「経験」となり、伝承可能あるいは蓄積可能な知識として生成される。「語る」という行為は、人と人との間に張りめぐらされた言語的ネットワークを介して「経験」を象り、それを共同化する運動にほかならない。柳田國男が「話のカタルにも元は多数の参加、知識の共同の意味があつたのかと私は思う」と述べているのも、そのような意味に受け取られるべきであろう。

ところで、「経験」という概念は、哲学的文脈においてはこれまで極めて乏しい内容をしか与えられてこなかった。とりわけ「経験主義」を標榜する哲学者たちは、経験を瞬間的な「感覚的知覚」あるいは五官による「感覚与件の受容」とのみ解してきた。そこに欠落しているのは、一つは経験を経験たらしめている時間的広がりあるいは文脈的契機に対する理解であり、今一つは経験を構成するに当たって不可欠の役割を演じている言語的契機に対する認識である。前者の要件については、藤本隆志が剗切(がいせつ)な説明を与えてくれている。彼によれば、「経験」を表すインド・ヨーロッパ語系の言葉は、例外なくそのゴゴンが何らかの対象を「通り抜ける」という意味をもっている。それどころか日本語の「経験」もまた、同様に「験しを経る」という意味を備えている。それゆえ、「経験とは、ひとが何らかの嘗試を通り抜けることから、あるいはそれを通り抜けることにおいて、カクタクされるものとココントウザイの人々がちゃんと了解していたこと」が知られるのである。以上のような考察に基づいて、藤本は経験概念を次のように敷衍する。

さて、このように理解された経験概念の下では、ただ単に感覚していたり、知覚していたりすることはそれだけでは経験といえない。自分で行為を試みて、その結果を知覚すること、言わば自己の行為とその結果との非可逆的な因果関係

を通り抜けることによって、はじめて経験が成り立つのである。言い換えれば、経験は少なくとも二つのことがらの関係了解であって、単項的な一つのことからの認知(知覚)よりも一段とレベルの高い認識なのである。

ここで述べられているのは、経験とは瞬間的な感覚や知覚ではなく、「自己の行為とその結果との非可逆的な因果関係を通り抜ける」という時間的広がりの中で獲得されるものであり、それは「関係了解」という文脈的理解に支えられているということである。因果関係の了解は、当然のことながら、その都度の行為の場面で完結し、忘れ去られるわけではない。それは記憶の中に蓄えられ、次に同種の行為を行うに際しては、それを規制する一種の規範として機能することである。俗に「経験豊富な人」と言われるのは、そのような規範を数多く身につけ、それを状況に応じて適切に利用できる人の謂である。

そのような経験は「語る」ことを通じて伝承され、共同化される。やがてそれは「生活世界 (Lebenswelt)」の下層に沈澱することによって、われわれの行為を制約する「生活形式 (Lebensform)」へと転化するであろう。あるいは、それを「アポステリオリ」の「アプリオリ」への転化と言いつてもよい。つまり、「経験」の反復によって獲得された規範が、沈澱を通じて間主観化されることにより、逆に「経験」を可能にする条件へと転成を遂げるのである。

ここで、経験を伝承し共同化する言語装置をわれわれは「物語」と呼ぶことができる。経験は「物語行為」を通じてガダマーの言う「作用影響史」の伝統に連らなり、それによって歴史的経験としての厚みと広がりとを獲得することができる。先にわれわれは、経験主義的な経験概念の狭さを批判しつつ、経験の構成に言語が不可欠のケイキとして参与していることを指摘したが、それを改めて述べ直すならば、「経験は物語られることによって初めて経験へと転成を遂げる」と要約することができるであろう。

それでは、経験を「語る」とはどのような言語行為なのか。それを解明する上で一つの手がかりとなるのは、A・ダントーが提起した「物語文 (narrative sentence)」という概念である。まずは彼自身による物語文の定式化を見ておこう。

これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちに、より初期のものだけを(そしてそれについてのみ)記述するのである。通常それらは、過去時制をとる。

物語文は、少なくともふたつの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する。しかしこの構造はまた、ある意味で通常行為を記述するのに用いられるすべての文に現れている。

ここで注目しておかねばならないのは、物語文が時間を隔てた二つの出来事を指示すること、それは過去時制で語られること、そしてそれは行為を記述する文一般の特徴であること、この三点である。これらのメルクマールは、先にわれわれが確認した「経験」の成立要件、すなわち自己の行為とその結果との間の関係了解という特徴づけとも合致する。それゆえ、われわれの経験の記述は基本的に物語文という形式に則してなされると考えてよいであろう。

例えば、「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という戦争の自慢話を取り上げてみよう。これは典型的な物語文である。ここでは「奇襲作戦の提案」および「味方の勝利」という二つの出来事が指示され、時間的に先行する前者がその後を生じた後者に照らして記述されている。奇襲作戦の提案はそれ自体ではいまだ「経験」の記述とはならない。それは無謀な作戦として上官に退けられるかもしれないし、また酒席の冗談として仲間から無視されるかもしれない。それは味方の勝利というもう一つの出来事と関連づけられることによって、優れた提案としての評価を受け、「物語る」に値する経験となるのである。

また、先の文を「私が提案した奇襲作戦は味方の勝利の原因であった」と書き換えてみればわかるように、これは因果関係の了解を表明する文にほかならない。物語文はすべて、原則的に因果関係を表現する文に書き直すことができる。つまり、物語文は複数の出来事の間因果関係のコンテキストを設定する役割を果たすのである。奇襲作戦の提案は、当り前のことだが、提案がなされた時点ではいかなる出来事の原因でもない。それは味方の勝利という後続する結果によって初めて原因

としての有意義性を獲得するのである。それゆえ、その提案の意味は提案の時点では完結しない。あるいは、その時点だけを孤立化して考えるならば、その提案はいかなる意味をももたないであろう。有意義性は後続する時間的コンテキストの中で生じるのであり、時間を通じて熟成するのである。物語文は複数の出来事を時間的コンテキストの中に位置づけ、関連づけることによって、一つの「物語」を構成する。したがって、こう言うことができよう。経験が因果の関係了解である以上、経験は「物語」を語る言語行為、すなわち物語行為を離れては存在しないのであり、逆に、物語行為こそが「経験」を構成するのである、と。

ところで、ダントーは物語文に対立するものとして「理想的年代記 (Ideal Chronicle)」という概念を提起している。それはラプラスのデーモンになぞらえられるような超人的能力を備えた理想的な年代記作者によって執筆される詳細な歴史記録であり、以下のような特徴をもっている。

彼はたとえ他人の心の中であれ、起こったことすべてを、起こった瞬間に察知する。彼はまた瞬間的な筆写の能力も備えている。「過去」の最前線で起こることすべてが、それが起こったときに、起こったように、彼によって書き留められるのである。

要するに、「理想的年代記」とは、すべての出来事をそれが起こった瞬間に記録する膨大な歴史年表のようなものである。それゆえ、この年代記作者は「私は奇襲作戦を提案した」および「味方の部隊が勝利をおさめた」という二つの出来事を独立に記述することはできても、「両者を関連させて一方が他方の「原因である」と述べることはできない。「現在」が「過去」に転化する一瞬を捉えて出来事を記述することを役目としている以上、彼は「原因である」や「運命づけられた」のような遡及的に過去を再編成するような語彙をもたないからである。つまり、彼は複数の出来事を一定のコンテキストの中に位置づけ、関連づけることができないのであり、一言でいえば「物語」を語ることができないのである。

理想的な年代記作者の置かれている立場は、先に言及した経験主義者の経験概念と類比的である。彼らは経験を今現在の

「感覚的知覚」あるいは「感覚与件^シの受容」と同一視した。したがって、彼らはその都度の知覚経験については感覚与件言語を用いて記述することができるであろう。しかし、それを過去の出来事と関連づけて語ることはできない。経験主義の立場をケンジ^スする限り、過去の出来事の記述に意味を与えることには多大の論理的困難が伴うからである。例えば、過去に関する命題を「経験的に」、すなわち現在の知覚によって検証することは不可能であろう。もしできたとしても、それはあくまでも過去の痕跡に関する現在の知覚の記述であって、いささかも「過去」の出来事の記述ではないからである。それゆえ、A・J・エヤーは「過去に関する命題は、通常それを検証すると言われている「歴史的」経験を予言するための規則である」という苦しい弁明をせざるをえなかった。そのような困難が生じるのは、P・リクールの言葉を借りれば、「経験主義は知覚の言表に対応する現在形の動詞しか知らない」からである。これが理想的年代記者が立っている場所にほかならないことは明らかであろう。

理想的年代記者と素朴な経験主義者とに共通して欠落しているのは、「経験」は時間的幅をもったコンテキストの中においてのみ成立する、という基本的事実に対する認識である。さらに言えば、経験はある時点で完結することは決してない。彼らの意に反して、経験は生成し、増殖し、変容し続けるのである。見方を変えれば、それは、過去は決して完結することなく変化し続ける、ということにほかならない。これは別に奇矯^ツな物言いではない。物語文の構造を考えるならば、それは自明の帰結とさえ言ってよい。

繰り返しておけば、物語文とは、時間的前後関係にある複数の出来事を一定のコンテキストの中で関連づけるような記述である。それゆえ、コンテキストが変化すれば、過去の出来事の意味づけもまた変わらざるをえない。先ほどの「私が提案した奇襲作戦は味方の部隊を勝利に導いた」という文をもう一度取り上げよう。その後、当の部隊は、孤立した別の部隊からの支援要請があつたにも拘^かわらず奇襲作戦を強行し、大局の戦略を誤ったことが判明したとする。そうすれば、先の記述のもとでは賞賛すべき行為であつたものが、「私が提案した奇襲作戦は大局の戦略を誤らせる結果になった」という記述のもとでは非難すべき行為に変わっていることがわかるはずである。これは別に奇妙でも何でもない日常茶飯の出来事にすぎない。無名のまま死んだ貧しい神父が数十年の後に「メンデルの法則」の発見者として科学史に名を残し、生前は数えるほ

どしか売れなかったゴッホの絵が今や数十億の値で取り引きされていること、あるいは旧ソ連における「粛清」と「名誉回復」を端的な実例として挙げてよい。

このように言えば、おそらく、それは過去の出来事の「評価」が変化しただけであり、過去の「事実そのもの」が変わったわけではない、と反問されることであろう。しかし、それは理想的年代記作者の立場からの反論であるにすぎない。孤立した「事実そのもの」は、われわれの歴史の中には場所をもたないのである。それが「有意味な事実」である限り、その意味は他の事実との連関の中にしか存在しない。「事実そのもの」を同定するためにも、われわれはコンテクストを必要とするのであり、物語文を語らねばならないのである。

一つの出来事は、それに後続するさまざまな出来事との間に形作られる関係のネットワークの中に組み込まれることによって、次々に新たな意味を身に帯びて行く。物語文はそれを再記述、再々記述することによって、われわれの経験の地平を幾重にも重層化して行く役割を果たしている。その意味で、物語文は現在のパースペクティヴから過去を再解釈することによって歴史的伝統を変容させる「経験の解釈装置」にほかならない。そして、時間に終結点がなく、歴史が未来に開かれているものである以上、物語文にも完結はありえない。

（野家啓一「物語の哲学」より）

問一 「輪郭^イ」とあるが、「郭」を用いた語句として、**適当でないもの**を次の中から一つ選べ。 17

- 1 内郭 2 外郭 3 地郭 4 周郭 5 城郭 6 胸郭

問二 「柳田國男^ウ」が手がけた著作の題名を次の中から一つ選べ。 18

- 問三
- 1 大和物語 2 伊勢物語 3 次郎物語
4 雨月物語 5 遠野物語 6 日本残酷物語

問三

「剽切(がいせつ)」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

19

- 1 大胆 2 妥当 3 良質 4 奇異 5 卓抜 6 希有

問四

「因果」とあるが、これと結びつかない語句を次の中から一つ選べ。

20

- 1 人 2 者 3 律 4 好転 5 応報 6 法則

問五

「典型的」の対義語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

21

- 1 具体的 2 例外的 3 逆説的 4 象徴的 5 総合的 6 網羅的

問六

「与件」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

22

- 1 条件 2 投与 3 参与 4 所与 5 要件 6 案件

問七

「奇矯な」の言い換えとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

23

- 1 怪しい 2 突飛な 3 珍しい 4 微妙な 5 厳密な 6 難しい

問八

「ゴコン」「カクトク」「ココントウザイ」「ケイキ」「ケンジ」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中か

ら一つ選べ。

24

28

- オ 1 コンバンの騒動 2 コンジョウの海原 3 何度もコンガンする

問九

つ選べ。 29

- | | | | |
|---|---------------|-----------------|-----------------|
| カ | 4 あからさまなコン タン | 5 コ ンキよく作業をする | 6 チームをコ ンセイする |
| キ | 1 トク シンが行く | 2 ヒト クされた財産 | 3 ジン トクゆえの成功 |
| ク | 4 現場をカ ントク する | 5 トク テンとしての付録 | 6 トク メイセイの高い投書欄 |
| コ | 1 オン コ チシン | 2 コ シタンタン | 3 エイ コ セイスイ |
| ク | 4 コ グン フントウ | 5 ユウ ソク コ ジツ | 6 コ シヨク ソウゼン |
| ク | 1 チャ キ を作る | 2 ホウ キ を破る | 3 ヒコウ キ に乗る |
| ク | 4 病がカイ キ する | 5 開催をエン キ する | 6 バイ ヨウ キ で育てる |
| ス | 1 ケン メイ な判断 | 2 ケン キヤク を誇る | 3 精神をケン マ する |
| ス | 4 社会にコウ ケン する | 5 アン ゼン ケン に達する | 6 組織のチュウ ケン 的存在 |

「経験」とあるが、筆者は「経験」についてどのように考えているか。最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 経験は、時間的幅を持った因果の関係了解のなかでのみ成立する。
- 2 経験は、「物語る」ことを通じて、過去から現在を再解釈することで構成される。
- 3 経験は、各人に固有の瞬間的な感覚や知覚であるため、他者に伝えることは究極的には不可能である。
- 4 経験は、感覚与件に即した言葉を峻別することの反復によって、体験が「物語」化されたものである。
- 5 経験は、本人にのみ接近可能な私秘的体験であるからこそ、時間を通じて熟成していくことができる。
- 6 経験は、自己の「感覚的知覚」を判断材料として照らし合わせることで、歴史的過去の事象を了解することである。

問十

「アポステリオリ」の「アプリアオリ」への転化」とあるが、その意味として最も適当なものを次の中から一つ

選べ。
30

- 1 個人の生活形式は伝承され、共同化されることで、共同体の物語となる。
- 2 経験が物語られることで因果関係が了解され、やがて自明のこととなり、忘れ去られる。
- 3 経験豊富な人は数多くの規範を身に着け、それらの規範を状況に応じて使用することができる。
- 4 物語は「物語行為」を通じて伝統となり、歴史的経験としての厚みと広がりを獲得することができる。
- 5 ある行為と結果が繰り返されることで得られた知見が言語によって共有され、共同体の生活形式になる。
- 6 経験豊富な人が社会的地位を得ることで彼の経験が伝承され、やがて間主観化され、共同体の規範となる。

問十一

「過去は決して完結することなく変化し続ける」とあるが、その説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。
31

- 1 過去の出来事はある時点で完結することはない。
- 2 過去の経験に対する評価は絶えず変化するものである。
- 3 過去の出来事は膨大な歴史年表のように変化するものである。
- 4 歴史年表に記述される出来事は膨大で絶えず書き換えられている。
- 5 因果関係が変化すれば、過去の出来事の意味づけもまた変わらざるを得ない。
- 6 歴史的な物語が変化するため、経験主義的な立場で過去を語ることはできない。

問十二

本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。
32 () 32 の欄に、二カ所マークすること

- 1 理想的な年代記作者は、現在が過去に変化する一瞬を捉えることで、遡及的に過去を再編成する。
- 2 理想的な年代記作者は、すべての出来事をそれが行われた瞬間にそれぞれ独立したものとして記録する。
- 3 理想的な年代記作者は、経験主義の立場に立ち、独立した出来事をネットワーク化することで年代記を編纂

する。

4 われわれの歴史は、過去の事実の痕跡をその都度記述し続けることで、経験に奥行きと厚みをもたらしてきた。

5 われわれの歴史は、複数の事実を時間的コンテキストの中に位置づけることで、歴史的経験をその都度現在形として物語ってきた。

6 われわれの歴史は、時間的広がりを持つ文脈理解と、物語ることによる経験の共有によって、事実さまざまの意味を付与してきた。

国 語

解答例

大問一		解答
問一	1	②
問二	2	④
問三	3	⑤
問四	4	①
問五	5	②
問六	6	⑥
問七	7	④
問八	イ	8 ①
	才	9 ④
	力	10 ④
	サ	11 ③
	セ	12 ①
問九	13	②
問十	14	⑥
問十一	15	⑥
問十二	16	③
		④

順不同

大問二		解答
問一	17	③
問二	18	⑤
問三	19	②
問四	20	④
問五	21	②
問六	22	④
問七	23	②
問八	才	24 ⑤
	力	25 ①
	キ	26 ⑥
	コ	27 ③
	ス	28 ⑥
問九	29	①
問十	30	⑤
問十一	31	⑤
問十二	32	②
		⑥

順不同